

---

# スマプラメンバーを1つの町に凝縮中

ほーき雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スマブラメンバーを一つの町に凝縮中

### 【Zコード】

Z2698Z

### 【作者名】

ほーき雲

### 【あらすじ】

五武山市、僕の小説の大半はここが舞台である。だったらスマブラメンバーをここに住ませてみたらどうだろうか？いちいち五武山市に来る必要はない。最初からいるのだから。（笑）

そんなテンションで始まったが・・・。

## プロローグ（前書き）

予告編の続きです。見てない方は活動報告のアーカイブをご覧ください。

## プロローグ

ある日、ほーき雲は立ち上がった。

ほーき雲「スマブラメンバー全員探すつて絶対1人じゃきつい。しかも五武山市つていう広い場所に散らばっちゃつてるんだもん。」

実は全員ほーき雲の近所にいるのだが・・・。

ほーき雲「誰かに救援要請しよう。」

マスター・ハンド「あれ? ほーき雲からメール?」

クレイジーハンド「ほーき雲からメール?」

D「ほーき雲からメール来たよ。」

『【救援要請】五武山市内に散らばつたスマブラメンバーを全員僕の家に近くに集合させてください。僕一人じゃ足りません。よろしくお願いします。』

ちなみに、Dって何だ!?って思った人は大規模な逃走中にて詳細を知ることができます。

マスター・ハンド達「探すか!」

全員ほーき雲に協力するよになつた。

みんなほーき雲の家から離れたところに行つた時、スマブラメンバ  
ーは・・・。

リンク「みんなどうする?」

リュカ「家でゲームやる!」

ルイージ「4人1組になつて分かれよう!」

全員「賛成!」

こいつらが家にいる限り、ほーき雲達はスマブラメンバーを1人も  
見つけられないだろう。

続く

## //ナカ 捜索隊（前書き）

「いつだね」と思いましたか？

## ミサカ捜索隊

ほーき雲はスマブラメンバーを探す途中、ある少女に出会った。

ほーき雲「ちょっと打ち止めちゃん。人探しに協力してくれない？スマブラメンバーを探しているんだけどね。この五武山市のどこにいるのかわからないんだ。そこで君を含めた9970人でスマブラメンバー達を探して欲しいんだ。」

打ち止め「それじゃ、全妹達に指示してみる。ついでミサカはミサカは了解してみたり。」

その瞬間、いきなり9969人が現れた。しかも全員全く同じ服装、全く同じ体型である。

シスター<sup>ズ</sup>  
妹達。

それはある電撃使いのクローン体である。20000+1体が造られたが、そのうち10031体はある『最強の超能力者』によつて殺されている。

ちなみに、+1体というのは制御個体で、ほーき雲が出会った少女のことである。

ほーき雲「これだけいれば全員見つかるだろ？。」

打ち止め「でも、ミサカは行かないよ。ついでミサカはミサカは自分の参加だけは断つてみたり。」

ほーき雲「十分だよ。9969人もいるのはありがたい。さらに僕もいれてマスター達もいれて9973人。これで見つからなかつたらヤバイよね。」

そして夕方。

ほーき雲「かなり疲れた・・・。見つかつた?」

検体番号「12345」「すみません!見つけたのですが逃げられました。ヒミツカは失敗報告をします。」

ほーき雲「ヒミツで見つけたの?」

検体番号「12345」「ちゅううヒミツの家の隣ですよ。ヒミツカは報告します。」

ほーき雲「・・・え?」

検体番号「12345」「ですから、この家の隣でマリオと思われる赤いおつせんを見つけました。ヒミツカは再度言います。」

ほーき雲「・・・まさかみんなもヒミツに住んでるの?」

検体番号「12345」「その可能性が一番高いです。ヒミツカは脳内の計算により当然の答えを出します。」

ほーき雲は隣の家をノックしてみた。

「マリオ「あつ、ほーき雲だ。ゲームしたいの？」

「ほーき雲「・・・君達ここに住んでたのね。他の人達は？」

「マリオ「みんなこの近くの家に住んでるよ。」

「ほーき雲の力は抜けてしまった。その後、どうやつて夕御飯を食べて、眠りについたのか覚えていなかつた。

続く

〃サカ搜索隊（後書き）

いきなりスマブラ以外のキャラクター出しあがつて・・・。

市長が死んだ。（前書き）

いきなり何があつたんだ！？

## 市長が死んだ。

翌日

ほーき雲「ああ、よく寝た。」

リンク「うちはお前の家に連れていくの大変だつたんだが。いきなり氣絶しやがつて。」

ほーき雲「すぐ隣だらうが。」

ヨウシー「ううう、ううう、空き家にくつあるの？」

ほーき雲「50を越えてるつて聞いた。」

ピット「だから1人1件でいいんだ。」

ほーき雲「とにかくたくさんあるんだよね。」

新聞社の人「号外！号外！大変なことになつたぞ！」

ほーき雲「大変なことになんだ！？」

ほーき雲は号外新聞を一つもらつ。

ほーき雲「なんだつてえ————」

D 「どうしたの？」

ほーき雲「市長が・・・・死んだ。」

「ほーき雲ーそれでさ、新市長の立候補者がコイツ一人だけなんだ  
どね。」

ほーき雲ーね<sub>ト</sub> ヤバイだろ。

ネス、来たばかりなのになんでこゝへなるの？」

「お雲、知るかよ！ しがも問題は、」シヤネル！

文部省圖書

五 武士のはんかくを司りてゐんか

卷之三

に一九零八年本復刊

続  
<

市長が死んだ。（後書き）

立候補者は危ないやつらしき。

## 新市長大作戦（前書き）

誰なんだよー！？だいたいわかるかな？

## 新市長大作戦

ほーき雲「ほら、あれを見ろ。」

ほーき雲が見ているものは・・・。

タブー「これから私タブーが新市長となるのです!皆さんぜひ私に投票をお願い致します!」

ほーき雲「わかつただろ。大声でタブーが演説してるんだ。しかもあいつ以外に立候補者はいない。このままじゃタブーが新市長。となれば五武山市は終わるだろうな。」

リュカ「こんなのじうすつやいいんだよ・・・。せつかく来たばかりなのに・・・。」

ほーき雲「方法なら一つある。他の誰かが立候補して選挙に勝つんだ!」

マスター「ハンド」しかし、それが難しいのは自分でもわかってるんだ。今のタブーの支持率は最大。そこをじうやつて勝つか思い

付かないんだる。普通やつだる。誰が立候補するのかすり決めてないのにな。」

マスターの発言は最もである。しかし、それを否定するかのように発言をした者がいた。

D「もし、僕を含めた皆の仲間たちの中で、『リーダーシップ界の王』と呼ばれる男が立候補したらどうなると想ひ?..」

ぼーき雲「そういうやつがいたら苦労しないよ。」

D「やうこいつは実際にこる。しかも遊び、仕事に関わらず最高のリーダーシップを見せる男。そいつが何回仕切っても誰も文句を言わない。しかもそいつの夢は政治家だ。市長になるのも第一歩になるはずだぜ。そいつの夢のため、タブーからこの五武山市を守るために、そいつを立候補させてみないか?..」

全員「おおー—————！」

ぼーき雲「おい、1つ言つておぐれ。勝てるかわからないのはわかっているが、もし勝つたとしたら、タブーは攻撃するかもしない。その時のために、選挙当口は戦闘態勢に入つとけよ。」

アイク「そこんところは大丈夫だぜ。なあみんな。」

アイク以外「おお――――――――――！」

「よしーその勢いだ。それじゃ、やつのところへ行こまやか。」

続  
<

## 新市長大作戦（後書き）

果たしてどんなやつなのか？タブーが市長にならじとを止められるのか？

## T (前書き)

この小説は文字数の目安を400～700文字にしてるから毎日更新できません。

T

D「おーい。」

????「なんだ、Dじゃないか。」

D「お前、五武山市の市長になれるとしたらなりたい？」

????「そりゃなりたいさ。地方自治でもいいからやつてみたいもんだな。ところで、たくさん人を連れてきたな。どうしたんだ？」

ほーき雲「突然市長が死んで、新市長立候補者がタブーっていう悪いつしかいないです。」

????「そりゃいけねえ。僕が新市長立候補してやる。ちなみに、僕の名前はTだ。」

ほーき雲「T? Dに続いてTですか?」

T「そうだけど?」

ほーき雲「おーいD。これはどうにうじとだ?お前の仲間はアルファベット1文字のやつしかいないのか?」

D「うーん。それが大半を占める。でもそれ以外もいることにはいる。」

ほーき雲「突然だけど例え話しようか?。例えば、僕がマルスに腹が立つたとして。」

マルス「なんで俺なんだよ。」

ほーき雲「僕がマルスをボコボコにしたとする。この小説を読んでいる人にはマルスが好きな人が若干いることにいるんだよ。」

マルス「なんで若干しかいないんだよ。」

ほーき雲「だけど君はオリキャラだから君のことが好きなやつは超不人気マルスよりも少ないことになるんだな。」

D「それがどうしたのかな?」

ほーき雲「つまりマルスよりも強力に痛めつけてもいってことになるんだよ。」

D「なんで何気なく武器持つてるのかな?」

ほーき雲「僕だって武器くらい持つんだよ。まあどうする?」

D「そもそもなんでこんな目にあつているのかわからな・・・」

ドカーン!

Dは奇跡的に生きていた。

ほーき雲「もつとまともな名前のやつを友達にするよつ。別に今仲間を見放せとは言わないから。」

D「また今度紹介します。」

何はともあれ、新キャラのトと共にタブーの新市長阻止作戦が始まつた。

続く

T（後書き）

Dはいい人なんですよ。今回ひどい目にあつただけで。

## みんなで作り上げる作戦

ほーき雲たちは選挙に向けて頑張っていた。立候補するのはTだけだが、ほーき雲やスマブラメンバー達には絶対にTを新市長にしなければならない理由があった。彼を市長にできなければタブーが市長になるのだ。

ほーき雲「僕達も協力してるし、Tも演説がんばっているし、なんとか新市長になれるかな。」

D「僕だつてちょっとケガしてるけど、Tの直接的な友達としてしつかりフォローしていかなくちゃ。」

ほーき雲「よくちょっとのケガで済んだな。」

ほーき雲達は、Tが新市長になるために、タブーが新市長になるのを阻止するために、2つの思いを込めてポスターの貼り付けを始めとする手伝いをしている。

### 選挙前日

T「きっと大丈夫。みんな頑張ってくれたじゃないか。タブーがなんだ。あんなやつを市長にはしない。」

ピット「頼もしい。」

ほーき雲「なあ、みんな頑張ったもんな。タブーなんかに負けないよな。」

全員「おお-----！」

ほー也雲「あとは結果を残すのみだ！」

続く

## みんなで作り上げる作戦（後書き）

次回は選挙本番。丁か？それともタブーか？

## 選挙中、役所前

ほーき雲達は五武山市役所に来ていた。・・・と言つても来ているのはほーき雲、D、Tの3人だけ。スマブラメンバーまで全員で来られたらすゞいことになるからだ。

ほーき雲「次々と人が市役所を出入りしている。みんなで投票してるんだね。」

D「あれ?タブーも来たぞ。」

タブー「おや?もしかして突然現れた2人目の立候補者とは君のことかなほーき雲君。」

ほーき雲「僕じやない。」いつだ。」

ほーき雲はTの腕をつかんで言った。

タブー「知らないやつだな。」

ほーき雲「お前、ポスターはちゃんと見る。市のあちこちにTって書いてあるだる。どこにほーき雲の名前があつた?言つてみな!」

タブー「こんなことで強気になりやがつて。俺がそいつを知つて無からうが、選挙で勝てばいいのだ。」

T「お前みたいなやつには負ける気がしないな。協力ということを知らなそうだ。」

タブー「何を言おうと俺の演説は大人気だ。このままだと俺勝つよ。勝つて恥かかせちゃうよ。」

ほーき雲「やつてみな！」

役人「これより投票を終了します。得票計算までしばらくお待ちください。」

ほーき雲「さあ、投票が終わつた。あとは結果だけだぜ。」

続く

選挙中、役所前（後書き）

これ一応コメデイーだよね？本気でいがみあつちやつたりバトルしたり・・。

役人「選挙結果が出ました！丁氏がタブー氏の約5倍という差で勝ちました！」

タブー「許せなー……許せなーぞ……」

タブーが暴れだした。

ほーき雲「予想通り、ことん裏切らないね。スマブラメンバー達。今が腕のみせどころだぜーー！」

# スマブラメンバー一斉にタブーに突撃。

しかし、それで降参するタブーではない。必死で抵抗していく。

# フォッケスースマートボム!

ルイージーファイアジャングパンチ！」

あちこちから攻撃が飛んでくる。やはり人数では勝てないのだろうか。

# ネス「スマッシュユーボール！」

リュカ「スマッシュボール！」

ほーき雲「さあやつちまえーー！」

ネス・リュカ「PKスターストームーー！」

無数に降る青と黄色の隕石。それをタブーは何回も当たつていぐ。

タブー「絶対仕返ししてやるーー絶対だぞー！」

タブーは一応去つた。

全員「タブーを倒したぜ！」

そしてタブーは

タブー「スマブラメンバーおのれーーー。」

タブーの近くに白っぽい男が現れた。

タブー「あいつ殺せば少しほはスースとするかなーーー？」

タブーは白っぽい男に襲いかかる。

その瞬間の出来事だつた。タブーが男に触れた瞬間、はねかえすような力が自分にかかつているのがわかつた。

一方通行「なんだお前？」

タブー「お前こそ何者だ！」

一方通行「何者だだと？ならば問題です。学園都市最強のレベル5  
といえば誰でしょうか？」

続く

## 5倍（後書き）

一方通行、読み方は『アクセラレータ』です。

## 一方通行（アクセラレータ）（前書き）

敗北したタブーのもとに現れた <sup>アクセラレータ</sup>一方通行。どうなるでしょう？

## 一方通行（アクセラレータ）

一方通行「俺をナメンなよ三下ア！」

タブー「お前が何者かは知らないが、俺がここで退く訳ねえだろ！」

一方通行「ならばここで問題です。この俺、一方通行は一体何をしているでしょウカ？」

タブー「知るか！」

タブーは構わず一方通行に攻撃する。何発も何発も。撃ちまくるが、一方通行は全ての攻撃を自分に触れた瞬間にはねかえしている。

タブー「お前、反射してるのか？」

一方通行「残念。ちょっとおしげけど、俺のしていることとは違つ。」

否定された。

一方通行「答えはベクトル変化。運動量、熱量、電気量。あらゆるベクトルを触れただけで変化できる。」

タブー「つまり、攻撃は当たらないくて訳か。・・・ビーム系ならね！」

タブーは今度は一方通行に体当たりをしてきた。

一方通行「いりねハやつだなア。しうがねH。30倍で反射してやるよ！あばよ三下ア！！」

タブーが一方通行に触れた瞬間、タブーはすこい勢いで吹っ飛んだ。こうして、タブーを巡った五武山市の危機は無事ハッピーHンドを迎えたのだった。

その頃、ほーき雲の家は

ほーき雲「おっと、タブーが吹っ飛んでる。2度と来るなよ。さあ、明日から楽しい日常生活を送るぞー。絶対に空き家村とは言われなこよくな愉快な場所にしてやるぞー。」

続く

## 一方通行（アクセラレータ）（後書き）

次回は新しい章に入ります。

大騒ぎしても近所迷惑にならない

タブーがいなくなり、平和な五武山市。しかし、空き家村では大騒ぎが起こっていた。

ほーき雲「いいか?ここは空き家村だ。そこに僕達は住んでる。つまり、この周辺には僕達しかいないことになる。それはどういうことか。答えは大騒ぎしても近所迷惑になりにくいつことなんだぜー。さあ、叫べ騒げの大盛り上がり大会を始めようぜー!」

「ほーき雲」「まずは大食いゲーム!! ルールは簡単。カービィかヨッシー。どちらがより多く食べるかを賭けろ!! ちなみに僕はカービィに賭けるよ!!」

ゼルダ「私はヨツシーに賭ける。」

ネス「僕はカービィに賭ける。」

カービィ「絶対負けない。大食いは僕の大事な特徴。それで負けたらカービィの名前が傷つく。」

ミジシー「みべ言つじやん。」ひちだつて伊達に食ひに来て食ひまへつてゐ院じやないんだよー。」

カービイ・ヨツシー「いくぞ！」

続  
<

# 限界が知りたい。

ほーき雲「カービィに賭けた人も、ヨッシーに賭けた人も、みんなで食べ物を戦場に運びましょ。やはり用意した食べ物を全部押し込めるのは無理でした。」

全員一正直面倒だけどまあいいよ。

こうして、みんなで大量の食べ物を運んで行く。たぶんみんな同じことを考へてゐるだろつ。

『食い過ぎだよ！普段の食事では全然満たされてないわけ！？』

そして、『戦場』に着いたほーき雲達は見た。

食べ物が無くなっている。しかも、両者共に次の食べ物を少しイラ  
イラしながら待っている。

ほーき雲「まだ余裕そうですね。」

カービィ「当たり前だよ！」

ヨッシー「早くみんなが持つてきた食べ物ちょうどいい！」

は一也嘆「せー。」

テーブルに置いた瞬間、両者共に恐ろしいスピードで食らいついていく。

ルイージ「ほーき雲、もつこれで最後だよ。」

ルイージの発言を一切無視し、最後の食べ物も全て食べてしまった。  
ほーき雲「これ以上食べ物は用意してないので、『2人で僕に勝つ  
た』といつことにします。」

こいつらの食事量は計り知れない。

続く

## 限界が知りたい。（後書き）

タイトル通り、こいつらの食事量の限界が知りたい。

なお、これからこの小説のみ感想返信担当を作ります。（スマブラメンバージャないけど・・・）

奇数日 一方通行 偶数日 打ち止め（ラストオーダー）  
アクセラレータ

が基本ですが、時々臨時で代役が担当することもあります。その時は後書き欄にちゃんと書きます。ちなみに今日は15日なので今日中に書いた感想は一方通行が返信します。

## 新登場

ほーき雲「突然ですが、新メンバーの登場です。ただし、知らない人が多いと思うので、簡単に紹介します。」

新メンバーを連れてきたほーき雲。

ほーき雲「また、これより『空き家村グループ』といつ名前が誕生します。」

リュカ「早く新メンバー呼んでください。」

ほーき雲「新メンバーはこちら、塊魂の王子とイトコハトコヒルキーの皆さんです。」

王子「ようしぐる。」

エース「面白そうだね。」

変わったキャラクター達がたくさん現れ、スマブラメンバーも注目している。そして中でも注目を浴びていたのがディップである。

ポポ「すごい！あちこちカラフルに光ってるよー。」

ディップ「ビックリ！あちこちカラフルに光ってるよー。」

？？？「とにかく僕の存在に気づいていますか？」

マスター・ハンド「わっ！…すぐ隣に透明人間…！」

「 ジャングル「ジャングルです。僕は透明なのでそこそこよろしく  
お願ひします。」

ほーき雲「こうしていいメンバー集まつたでしょ。他にも特徴的な  
キャラクターがたくさんいるからちゃんと交流してみることをおす  
すめするよ。最後に空き家村グループの意味を説明します。」

突然結成された空き家村グループ。どういう意味があるのか?それ  
は次回です。

続く

## 新登場（後書き）

今日は感想返信はラストオーダーがします。

打ち止め「わーいわーい。つてミサカはミサカは空き家村グループに入りたいと思いながらも喜んでみたり！！」

空き家村。

原因は不明だが、五武山市のある場所にたくさんの家が建てられた。しかし、これらに住む人は1人しかいなかつた。その1人がほーき雲である。

ほーき雲が住んでる1件を除いて誰も住んでいなかつたため、空き家村と呼ばれている。

そこへ今回、スマプラメンバーをこの空き家村の大量の空き家に住ませることにした。

空き家は確かに減つた。しかし、まだたくさん残つてるのが現状。つい先日までほーき雲も50件くらいしかないとと思っていたが、実際は数えきれないほどある。

ほーき雲はこの空き家村といつ名前を消すことが目的で、スマプラメンバーに加え、塊魂のイトコハトコ達も住ませたが、まだまだ空き家は残るのが現状。しかし、今までとは違い、住んでるのは1人ではない。住民は少しづつ増やせば良いだろう。と楽観的に考えられるようになつた。空き家村グループとは、空き家村といつ名前を消すためのグループである。（空き家村といつ名前が消えた時、グループ名も変える予定らしい。）

ほーき雲「それじゃ、新住民探して来るよ。」

ジュン「こつてらつしゃいほーき雲。」

バンバン「絶対空き家村なんて名前消してやるつねー。」

空き家村と呼ばれるエリアを抜けた瞬間、ほーき雲はつぶやいた。

ほーき雲「空き家村といつも前もそつだけど、このホールの名前も  
変えてやりたいよな。」

そこには、ほーき雲がスマブラメンバー達を集合させるために使つ  
ているホールがあった。

そして、そこには『境界ホール』と書かれていた。

続く

お家村（後書き）

次回は、ほーき雲が外出中の時のスマップラメンバー達の生活をお送りします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2698z/>

---

スマプラメンバーを1つの町に凝縮中

2011年12月17日20時48分発行